

福岡大学消化器内科における10年間の急性肝障害患者の臨床的検討（2000–2009）

釈迦堂 敏	西澤 新也	福永 篤志
四本かおる	久能志津香	櫻井 邦俊
岩下 英之	平野 玄竜	上田 秀一
横山 圭二	森原 大輔	坂本 雅晴
阿南 章	竹山 康章	入江 真
岩田 郁	早田 哲郎	向坂彰太郎

福岡大学医学部消化器内科

要旨：この10年間に、急性肝障害の診断で、福岡大学消化器内科で入院加療を受けた患者の臨床的検討を行った。症例は112例であった。B型急性肝炎が36例（32.1%）と最も多く、原因不明肝障害が32例（28.6%）、薬剤性肝障害が18例（16.1%）であった。C型急性肝炎はこの10年でわずか4例（3.6%）であった。2000年～2004年の前期5年間と2005年～2009年の後期5年間の比較検討では、B型肝炎ウイルスと薬剤による肝障害が増加していた。また、重症肝炎・劇症肝炎13例中、B型肝炎ウイルスが原因であるものが10例（76.9%）と最も多かった。B型肝炎による重症肝炎例では、劇症肝炎発症率が40%であった。また、B型肝炎ウイルスによる劇症肝炎では死亡率は50%と高率であった。国全体でのB型肝炎に対するユニバーサルワクチン開始を考慮する必要性が考えられた。また、近年増加している薬剤性肝障害には、健康食品による薬剤性肝障害も散見されるため注意が必要である。

索引用語：急性肝障害，急性B型肝炎，薬剤性肝障害，臨床的検討，福岡大学